片目の哲学

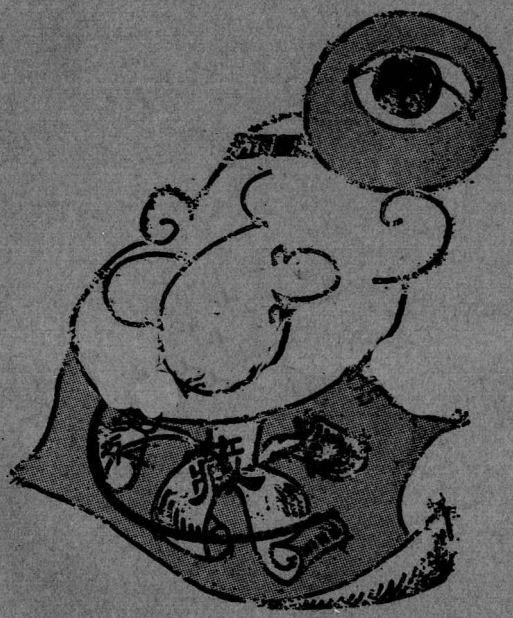
なだ いなだ

続・パパのおくりもの

片目の哲学

なだ いなだ

続・パパのおくりもの



■なだ　いなだ
本名堀内秀／昭和4年東京生れ／慶大医卒／「文芸首都」同人／著書に「パパのおくりもの」「クレイジードクターの回想記」「帽子を…」「レトルト」がある

片目の哲学

昭和42年7月15日　初版発行

■著　者　なだ　いなだ
■発行者　木原　保
■発行所　株式会社　大光社
東京都新宿区新宿3の43　電話東京(356)6651　振替東京54907
■印　刷　氷川印刷株式会社
■製　本　難波製本株式会社
定価430円
© 1967 Nada Inada printing in japan

<検印廃止>
万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします。

片目の哲学

装幀　小幡　堅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

もくじ

第一章　片目つぶって　9
新しい娘
片目つぶって
目は見るためだけのものではない
第二章　変な話に関する考察　23
変な赤ん坊
変な子もり歌
変なブーム
第三章　ケチンボとなまけものに関する考察
なまけもの
ケチンボ
第四章　女性について　57
女・このムジュンにみちた生物よ
美徳のかたまり
女性の飲酒と喫煙
女の涙

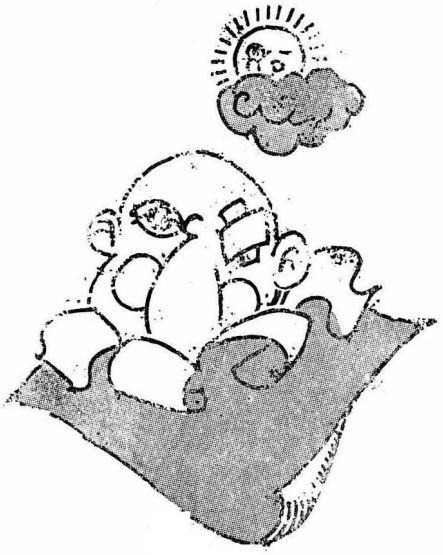
第五章　子供に関する考察　77
むかしの子供から
子供のユーモア
子供のケンカ
子供の口ごたえ
第六章　電話のマナー　101
電話のマナーについて
相手を確かめること
間違い電話
電話をみたらビフテキのことを考えよ
第七章　公僕精神と官僚精神　171
運転免許と診断書
人のふところ
第八章　何が真実かについて　129
ホントの話
ほんものと、にせもの

第九章　わからぬということ　145
質問者
病気がなくなること
理想好き
第十章　わがネコ　163
このごろのネコども
現代とネコ
第十一章　年令、少年と青春　177
年令というもの
体力テストと年令
悪童たち
悪童たち（続）
第十二章　笑うこと、笑わせること　197
笑い声
笑われること、笑わせること
政治とユーモア

第十三章　忘れえぬ人たち　213
忘れえぬアル中たち
忘れえぬアル中たち（続）
第十四章　海のほとりの病院で　227
みち潮
病院ぶとり
行軍
第十五章　医者という商売　243
診察室で
名医
ウンチクを傾ける
医者という商売
おわり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章
片目つぶって



(1) 新しい娘

パパは、お前たち娘たちに、「パパのおくりもの」という本を書いた。その頃、お前たちは三人の娘であった。今、パパは、もう一つ、お前たちのために本を書こうとしているのだが、実を言うと、その最初の本と今の本の間に、お前たちは四人にふえてしまったのである。おまけが一つ、くっついたというわけだ。おまけだなどと言うと、四番目の娘であるミキは、

「失礼ね、パパ」

と怒るかも知れないが、そんなに機嫌を悪くすることはない。おまけは、決して余計なものではない。昔、パパが小さかった頃、一粒三百メートルというキャッチフレーズで、グリコが売り出された。それには、おまけがついていて、そのおまけが欲しいために、グリコを買ったものだ。おまけを、余計なものと考えるなんて、とんでもないことだったのだ。

それに、この四番目の娘というおまけは、大変なものだった。なにしろ、生まれた時に、前の三人の娘たちが、三キロ七百前後で平均していたのに、四番目の娘のお前、ミキは、何

と四キロ六百以上もあったのである。それに、お前は、人間が勝手にコヨミの上できめたことではあるが、ヒノエウマという年に生まれて来たのである。四キロ六百なにがしといえば、昔風に数えると、一貫三百にほぼ近い。昔から、日本には、

「一貫三百どうでもいい」

という表現があるが、パパは、そのゆかりを知らぬ。だが、一貫三百は決して、パパにもママにも、それから、世話になった主治医の、パパの学生時代からの友人にとっても、決して、どうでもいいことではなかったのである。

ママは、女性の体重が、どうかすると急にふえはじめる年令に達していた。それで、ミキがおなかにいる最初の頃、あまりふとらないように用心して、おなかがすいても、食べすぎぬように、食べすぎぬように努力していた。パパの友人の医者は、彼の良心にしたがって、言った。

「赤ちゃんが、ちょっと小さいようです。栄養たっぷりのものを沢山めしあがるべきです」

ママは、決して素直な方ではないが、医者に対しては、模範的な素直な患者であり、それからというもの、ビフテキなどを、野球選手のスタミナ食のように、もりもりと食べた。

「よろしい。まあまあ、順調です」

パパの友人は、満足げに、そううなずいた。だが、ミキ、お前は、満月の日が来ても、何としても出て来なかった。それで遂に手術をすることになった。

かくして、お前はこの世の中に出て来ることになったのだが、出て来た時、パパの友人の医者に、片目をつぶって、そんなに小さくなくてごめんなさいと、ニヤッと笑ってみせた、と言いたいところだが、残念ながら、両目ともつぶっていた。しかし、友人は、

「いやあ、ぼくは、小さいと思ってたんだけどねえ」

パパに申し訳なさそうにそう言って頭をかいたのである。パパはと言えば、

「ビフテキが、ウマの肉にバケたか」

とつぶやき、ママに睨まれたのであった。

ともかく、こうして、ウマ年の一貫三百の娘が生まれたわけだが、どうしてどうして、どうでもいいおまけなどではなかった。

パパは、ユキが生まれた時、友人の作家である田畑麦彦に、「うちの娘は一貫目あった」と言った。その頃、やはり娘の父親になった彼は、「なになに、一貫目だって、うちの娘は、生まれた時、一貫三百あったぞ」と、調子にのって自慢したものだ。それを耳にした奥さんの、作家としても尊敬されている佐藤愛子女史は、こわい顔をした。(と思うのである。作家というものは、とかく自分で見たように書きたがるもので、この点、はしくれの作家といえども、パパもこの悪癖だけは持っている。実際は、きっとこわい顔をしたのだろうと想像するだけだ)そして、彼女は御亭主の田畑麦彦氏に言った。これは本当であろう。彼女が何かに書いていたことだから。

「あんた、一貫三百なんて本当に言ったの。実際は一貫百しかなかったのに」
彼は、実際には二百匁ばかり、水増ししたらしい。頭のキレることで仲間の間で有名だった彼も、親馬鹿たることはまぬがれられぬと思われる。彼も、釣師たちが釣った魚の大きさを自慢するように、娘の何でも、目方さえも、自慢してみたいものらしい。パパは、そんなことを言って彼をからかったものだった。このことは前にも書いた。
ところが、そのパパが、何と正真正銘の一貫三百の娘を持つことになったのだから、運命とは皮肉なものである。
全くもって、どうでもいいことではなかったのである。

三番目の娘のチカは、五年間、末っ子として育って来た。それで、このミキの出現には、少しばかり、とまどいを感じたようだ。チカはママに、
「あのね、ミルクを飲んで、おしっこをして、おぎゃあ、おぎゃあって泣くお人形が欲しいなあ」
と言っていた。
「さあ、あんたの欲しがっていたお人形よりも、もっといい、本当の赤ちゃんよ」
ミキを病院から連れて帰ったママは、チカの前に赤ん坊をさし出した。だが、すぐにチカは、顔をしかめて言うようになった。

「ママ、チカはね、ミルク飲んで、おしっこする人形が欲しいと言ったのよ」
「よかったわね。ミルクも飲むし、おしっこもするでしょ」
だが、チカは首を振った。
「でも、この赤ちゃんは、いやだ」
「どうして」
「だって、おしっこだけじゃなく、うんこまでするんだもの」

チカは理屈家である。これは、どうもパパに似ているらしい。このやりとりは、チカの一番チカらしいところをあらわしている。それはそうだが、実際のところは、このミキの出現で、自分が末っ子の座をおびやかされることになったのを、敏感に感じとって、不安になったのであろう。

どうも、前おきが長くなってしまった。さて、これから、パパがお前たちに書いてあげようと思っている本は、「片目の哲学」というものだ。哲学なんて言葉を見ると、すぐに堅苦しいものを感じるかも知れないが、そんなに難しいことを言ったり書いたりするつもりはないから、安心するがいい。そもそも、哲学というものは、大学で教わるものばかりではない。生きている人間は、多かれ少なかれ、みんな一人一人持っているものなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.